辺のみ削りの原形を保つ。

⑰は備後国品治郡から送られた庸米の荷札の断片であろう。同郡の荷札と特定できるのは、第三一五次調査出土のもの（一⑫）に続いて二点めである。下端は折れ。

⑱の和軍は、軍布が「め」であることからすれば、にぎめのことであろう。税目は不詳。讃岐国鵜足郡の荷札には、二条大路木簡に中男作物干鮹の例がある（本誌第一二号平城京跡、一㊶）。上端は切り込み部分より上部を欠く。

⑲は習書木簡。上端は折れ、左右両辺は二次的削り。

⑳は日付記載の末尾のみが残る断片か。上端折れ、右辺割れ。

9　関係文献

奈良文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』三六（二〇〇一年）

同『奈良文化財研究所紀要二〇〇一』（二〇〇一年）

（一　吉川　聡、二　渡辺晃宏）

奈良・平城京跡左京三条一坊七坪

1　所在地　奈良市二条大路南二丁目

2　調査期間　二〇〇〇年（平12）七月～八月

3　発掘機関　奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

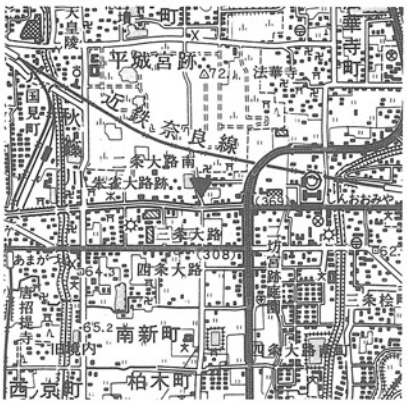
4　調査担当者　代表　田辺征夫

5　遺跡の種類　都城跡

6　遺跡の年代　奈良時代～平安時代初期

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

平城京左京三条一坊七坪は、平城京の中でも宮南面の一等地で、壬生門から南に下る東一坊坊間大路に面する。同坪ではこれまでに当研究所が七カ所の発掘調査を行なっており、宮前面では比較的調査成果の集約されている坪である。中でも一九九二年に坪中心部で実施した調査の報告書（奈良国立文化財研究所『平城京左京三条一坊七坪発掘調査報告』）では、ここを大学寮



（奈　良）

の所在地と推定している。宮前面の一等地であるにもかかわらず遺構が比較的小規模で、また奈良時代後半に坪内が整備されてくることや、平安京の大学寮推定地との位置関係などが主な根拠である。

今回の調査地は坪東辺中央部に位置し、調査面積は二八八㎡である。調査の結果、掘立柱建物・井戸・土坑・柱穴・石列などを検出したが、調査区の多くの部分は北西から南東に向けて流れる自然流路SD六一〇〇が占めている。SD六一〇〇は幅約五mで、埋土下層からは平城Ⅳ期（七六五年頃）・Ⅴ期（七八〇年頃）の土器類が、上層からは平城Ⅴ期から平安期の土器類が出土した。遺物はSD六一〇〇を中心として、土器には、「十」「研」「供」などの墨書土器計一五点、転用硯一六点、円面硯、漆付着土器、土馬片があり、また瓦には軒丸瓦・軒平瓦の他、二彩・緑釉平瓦がある。特殊な遺物としてはSD六一〇〇出土の鼈甲の破片がある。

木簡は、SD六一〇〇の底で検出した井戸SE七七九〇の上層から一点出土した。この井戸は、一辺八〇㎝の方形縦板組で、基底部に長径六五㎝短径四五㎝高さ二五㎝の楕円形の曲げ物を据える。井戸枠の板材の一点については、年輪年代測定によって七四四年の伐採という成果を得ている。

なお、今回の調査によっても、左京三条一坊七坪が大学寮であるとの確証は得られなかった。今後なおデータを蓄積して検討していく必要があろう。

8　木簡の釈文・内容

(1)　「□□□□□　□安万呂〔髪カ〕　(290)×13×8　019

上端は山形に整形、左右側面は削り、下端は折れている。幅の割に細長い木簡で、恐らく人名を数名分間隔をあけながら一行に記しているとみられるが、用途は不詳。左右は二次的に削られている可能性もある。

9　関係文献

奈良文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』三六（二〇〇一年）
同『奈良文化財研究所紀要二〇〇一』（二〇〇一年）

（渡辺晃宏）